
もう戻らない

公彦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

もう戻らない

【Nコード】

N0456K

【作者名】

公彦

【あらすじ】

それはまたしても気まぐれな一言から始まった。

野球部の部室を訪れた猪狩康平と藤井基樹は死体を発見してしまう。おまけに現場は密室。さらには矢式奈美香、新川怜奈も加わり事件に関わって行く事となる。

登場人物

いつもの面々

猪狩康平

○大二年

矢式奈美香

○大二年

藤井基樹

○大二年

新川怜奈

○大二年

野球部の人々

高木祐介

○大二年

南原信也

○大二年

本田圭介

○大二年

山本高志

○大二年

結城里美

○大三年

安田久

野球部監督

OB

野球部マネージャー

その他の人々

伊勢浩太郎

刑事

池田

刑事

プロローグ

ほんの二ヶ月ほど前の事である。彼らは殺人事件に巻き込まれた。その事件は犯人の自首という形で幕を閉じたが、猪狩康平をはじめ、やしきなみか矢式奈美香、ふじいもとき藤井基樹、にいかわれいな新川怜奈が事件に貢献した事は否定できない。そして彼らはこう思ったはずである。

「もう、このような出来事に巻き込まれる事はないだろう」

しかし残念ながら彼らはもう一度殺人事件に巻き込まれるのである。そして、何の因果か彼らを巻き込んだのはまたしても藤井基樹の一言であった。幸運にも矢式奈美香と新川怜奈は直接関係する必要はなかったのだが、持ち前の好奇心で自らその渦中に入り込むこととなった。

事件が解決した暁には各々が違った感想を抱くだろう。

「ああ、そうだったのね！」新川怜奈は素直に感服するだろう。

「俺、何かに憑かれてるのかなあ？」
「またも自分の発言で事件に巻き込まれた藤井基樹はそう言っただけ首をひねるだろう。」

「もう！ また康平に先を越された！」
頭脳明晰で自信家の矢式奈美香は悔しがるだろう。

その矢式奈美香を悔しがらせ、事件を解決する張本人の猪狩康平はこう言うだろう。

「もうこりこりだ」

プロローグ（後書き）

お久しぶりです。

前作よりはかなりマシになっているはずですが。

たぶん、

恐らく、

……そう思いたいです。

一章 開始する月曜日

1、

猪狩康平らの通う〇大は山の上にある、と言ったら語弊があるだろうか。しかし坂の上にある、では足りないだろう。駅からずっと山の方へ歩いて二、三十分ほど、それまではずっと上り坂である。その坂を猪狩は登っていた。季節はもう秋だが、坂を登っていれば汗をかくほどである。

今日は月曜日。なぜか月曜日は授業が少ない。何か意図的なものを感じる。そのため月曜日に授業を取らない、いわゆる「全休」を作る学生も多い。大学生の辞書に「ブルーマンデー」という単語は存在しないのかもしれない。だが、残念ながら猪狩には全休はない。「ブルーマンデー」という単語も自分の辞書に載っている。ただ、彼はそれほど苦に思っていないようだ。彼は「大学は勉強する所」というスタンスを崩していない。

しかし、大学に入って一年半、そのスタンスが揺るぎ始めているのも事実である。独り言のように授業を進める教員、大教室でマイクも使わず延々と喋り続ける教員、自分の研究内容を自慢しているようにしか見えない教員、そもそもなんの役に立つのかわからないような内容の授業。

猪狩は大学に着くと真っ直ぐ教室へと向かった。これから始まる授業もそんな授業のうちの一つ。

授業が進むにつれて周りの学生たちの筆が止まっていく。机に突っ伏して寝ている学生もいる。この授業は役に立たないとは言わないうが、授業の進め方に問題があるのだろうか、スライドに出ている数式は何の事だかわからない。一応説明が入るのだがうまく聞き取れない。これでは寝てしまうのも無理はないかもしれない。

(何のための大学なんだか)

猪狩はため息をつきたくなった。大学にまで来て寝ている学生に

も、授業とは呼べないものを進めている教員にも。

そもそも、大学の教員は自分たちの事を「教育者」ではなく「研究者」と認識していると聞いた事がある。彼らにとって授業は片手間に行くものなのかもしれない。

しかし、そういった授業こそ大学の授業だという人もいる。そういえば高校のときの教師で、大学時代に教授が自分の研究を黒板もスライドも使わずに発表するような授業がとても面白かったと言っていたのを思い出した。研究者の最新の研究が聞けるのがとても良いと言っていた気がする。要は聞く人次第なのだろう。来年のゼミは自分に合った教員の下で有意義に行いたいと猪狩は切に願っている。

居心地の悪い九十分を過ぎた後、猪狩は食堂へと向かった。月曜日ならば藤井がいるはずである。否、いつでも彼はいるはずである。

九月も終わりに近づいてきてずいぶん肌寒くなった。山の上にあるO大ではそれが顕著に感じられる。もう少しすれば紅葉の季節。緑一色だった景色の中に紅が混ざってきて、いずれはそれすらもなくなつて真っ白な世界になるのだろう。

猪狩は足早に食堂へ向かった。食堂はそれほど込んでいない、月曜日に来る者の特権だと勝手に思っている。火曜日など授業が終わつてから急いで来ても、席などまったく空いていない。席についている彼らは如何にして席を取つたのだろうか、授業があるという条件は同じはずである。

猪狩は食堂の奥で藤井を見つけた。彼は携帯電話をいじっているようだったが、こちらに気づくとそれをしまつて軽く手を振った。

「おう、今からメールするところだった」

「もう、飯食つたの？」猪狩が尋ねた。

「いや、まだだよ」藤井は大袈裟に手を振って見せた。彼はなんでも大袈裟に表現する事が多い。「行くか」

二人は席に鞆を置いて、昼食を取りに行った。

「うーん、何にするかな……」藤井がつぶやいた。

「ライスと味噌汁、あとトンカツ」猪狩は悩んでいる藤井をよそに迷うことなく注文する。

「先行ってるぞ」

「あ、ちよつと待てよ！ おばちゃん、カレーで！」

別に急ぐ必要もないだろうに、と思ったが口には出さず、そのまま会計を済ましてもとの席に戻った。会話もそこに食べ始める。

「なあ、キャッチボールしようぜ」藤井が言い出した。

「は？」

「だから、キャッチボール。最近、身体が鈍ってさあ」

藤井は高校時代、野球部にいらしい。名もない公立校だったが、一応四番だったとか。猪狩は趣味程度でしか経験がない。

「グローブなんて持ってきてないぞ」

「大丈夫、野球部のやつに借りるから。あいつら月曜は休みなんだ。部室に行けばグローブくらいあるぞ」

「……寒い」

「すぐ終わるって。暇つぶしだよ」

わざわざ寒い思いをしてまで暇をつぶす必要はあるのか。そもそも人のグローブを勝手に使うのはどうなのだろうか。それを猪狩が指摘すると、

「わかったよ。許可取ればいいんだろ？ あ、本田！」

藤井は二つ先のテーブルにいた本田という男に声をかける。小柄で猫みたいな顔だと猪狩は思った。

「何？」

「キャッチボールしたいからグローブ貸して」

「え？ 何、いきなり」本田はいきなりの要求に呆れて苦笑いしたがすぐに承諾した。「いいよ。俺も部室に用があったから。先輩の使われるとまずいし」

「オツケー。じゃ、行こうか」

2、

野球部の部室は少し坂を登った所にあるサークル会館の中にある。すぐ横に数台の駐車スペースがある三階建ての建物で、一階に運動部、二、三階に文系の部がある。いつも軽音楽部の騒音が外に漏れてくる。野球部は一階の廊下の一番奥の左側にあり、非常口がすぐそばにある。

「野球部って新人戦いつ？」藤井が尋ねた。

「十月入ってすぐ。三日から」

「どこ？」

「H工大。微妙だな。今年あんまりメンバーそろってないんだ。何でおまえ入らなかったんだよ？」本田はもの惜しげに、藤井を見た。

「名もない公立校の四番がいたって意味ないだろ」

「あのなあ」本田はため息をついた。「この大学に来るやつなんてみんなそうだって。どこの私学じゃあるまいし。四番なんて喉から手が出るほど欲しいっての」

「まあ、いいじゃん。俺は高校野球で燃え尽きたの」藤井がお気楽な声で言う。「でも、エースがすごいんだろ？ しかも二年って聞いたけど」

「ああ、高木のこと？」本田は顔をしかめた。「まあ……あいつのピッチングはすごいと思うよ」

「？」歯切れの悪い返答に二人は疑念を覚える。

「まあ気にするな。着いたぞ」何でもない、というように手を振った後、本田はドアノブに手をかける。が、ドアノブの代わりに捻ったのは首だった。「あれ、鍵が掛かってる？」

「鍵は？」

「ないよ、そんなの」

「はあ？」

「鍵があるなんて聞いたことないぞ。昔はあったんだろうけど」そう言って本田はドアノブを覗き込んだ。確かに鍵穴はある。鍵が掛

かるタイプのドアではあるようだ。「俺が入ってからは一回も鍵が掛かった事はないぜ」

「どうすんだよ？」

「うーん、困ったな……」

「学務課か守衛室だろ」猪狩が口を開いた。ずっと黙っていたので本田の反応は一瞬遅れた。猪狩の言動は慣れた者でないとタイミン
グが合わない事がしばしある。

「そっか。あ、その前にキャプテンに聞いてみよう」そう言って携帯を取り出した。「出るかな……」

「誰かいるんじゃないの？」本田が電話している間に藤井は思い立ってドアをノックしてみたが反応はない。

「……はい、はい。わかりました、失礼します」キャプテンと連絡がついたようだ。本田は電話を切る。「ないってさ」

「仕方ない。学務課に行こう」

学務課に行くのと野球部の部室の鍵は何年も前に紛失したと届出があったそうだ。もちろんその頃、彼らは入学していないのだが、やたらと嫌味を言われた。ましてや猪狩と藤井は野球部ですらない。いろいろと言われた後ですぐ返すようにと、鍵を渡された。

「ったく、なくしたのは俺らじゃねえっての」坂の途中で藤井が悪態をついた。

「貸してくれただけでも良しとしよう」と猪狩。

「だいたい俺とおまえは野球部じゃねえっての」

「知ってるよ」猪狩はいたって冷静に答えた。

「そもそもなんで鍵が掛かってたんだ？」本田が首をひねる。

「誰かの悪戯じゃねえの？ 鍵掛けて……そう、窓から出たんだよ。鍵いらなかったな」

「うーん、そんな馬鹿やるやついるかな？」

部室に着いて、本田は鍵を開ける。そして中の状況に驚愕する。

血を流して倒れている男が二人。

「高木！！ 南原！！」本田が真つ先に駆け寄り叫んだ。猪狩もとつさに男に駆け寄る。

脈はない。呼吸もしていない。けれど、死んでいるのかどうか、その判断は猪狩には出来なかった。ただ、身体は冷たかった。

「生きてるぞ！」もう一人の男を見ていた藤井が大声で言った。

「救急車！ 早く！」猪狩は本田に指示した。めずらしく大声だった。本田が慌てて走って行く。

猪狩はなんとなく窓に近寄った。外は駐車場。鍵がかかっていた。
「……………」

部屋の中を見渡してみる。整頓されてはいるが、もともと物が多いため、綺麗という印象は受けない。入り口の左手には救急箱や雑巾、ティッシュなどの備品が棚の中に入れられている。右手には普段使うボールやバットなどがまとめて置かれている。その横には冷蔵庫が備え付けられている。アイシング用の氷を作るためだろうか、飲み物も入っているかもしれない。真ん中のテーブルには野球用品のカタログや本などが乱雑に置かれていた。三年生のものだろうか、SPI対策の本まである。側面には一面に棚が続いており、部員の私物が入っている。その棚の上には合宿で使うのだろうか、鍋などの料理道具が入った袋と紙皿、紙コップ、割り箸などが入った袋が置いてあった。こんな所に置いておいて大丈夫なのだろうか、紙皿の入った袋にいたっては口が開いている。食中毒にでもなったら笑い事ではないだろうに。などと無駄な事を考える。窓の上に掛かっている時計は止まっていた。

「なあ、とりあえず出ようぜ。ここにいてもできる事ないって」藤井が顔をしかめて言った。落ち着きがないようだ。

「ああ」

思考から引き戻され猪狩は藤井と部室から出た。気まずい数分間
が流れる。

「こっちです!!」

入り口の方から本田の声が出た。もう救急車が来たのだろうか。

「こっちです。見てください!」

本田が呼んできたのは救急隊員ではなかった。もちろん呼んだだろうからもうすぐ来るのだろうが。彼が呼んできたのは保健管理センターの医師だった。確か、医師である。高校の養護教諭と違って医師免許を持っていたはずだ。髪の毛の薄さを長さで誤魔化している。健康診断で二度だけ見た事がある。年に一度だ。医師は猪狩が見ていたほうの男に近寄って何か調べていたがやがて首を横に振った。

「亡くなっています」

「そんな……」本田がうなだれてその場に座り込んでしまった。医師は急いでもう片方の男に駆け寄ったが特にする事はなかった。男が目を覚ましたからだ。

「うっ……」

「南原!!」

「大丈夫かい!？」

医師がそう聞くと首を縦に振った。しかし、どう見ても痛々しい。

「出血がひどい。早く処置しないと……」

遠くからサイレンの音が聞こえた。救急車が来たようだ。

そのあとはトントン拍子に事が進んだ。医師が適切な説明をしていたし、南原の意識はしっかりしていた。命に別状はないようだ。問題は死んでしまった高木の方。警察にも連絡する事になり、事情を話すためにその場に残らなくてはいけなかった。

本田はかなりショックを受けているようだ。チームメイトが死んだのだから無理もない。

「高木……」本田はずっと俯いている。涙目で今にも泣き出してしまいそうだ。猪狩と藤井は何も言えなかった。十数分間この沈黙が続いた。

パトカーのサイレンが聞こえたときには少しホッとした。何も解

決していないにもかかわらず。気まずい沈黙が破られたせいだろうか。とりあえず猪狩は外に出る事にした。

「あれ、君だったのか」パトカーから出てきた男が猪狩を見ていった。

「……？」猪狩には彼が誰だかわからない。会った事があつただろうか。記憶の引き出しを一つずつ開けてみる。

「……ああ、覚えてたんですか」

「君は覚えてなかったみたいだね」

彼の名前は伊勢浩太郎。道警の刑事で猪狩とは二ヶ月ほど前に一度だけ会っている。

「面倒ですよ」猪狩は部屋の方を指差した。

「殺しはなんだって面倒だ」

「密室ですよ、一応」

「好きなのかい、君？」

「ふざけないで下さい」

「はいはい。さてと、まずは現場を見るかな」

そう言つて伊勢は奥へと進んでいった。

3、

伊勢は現場である野球部の部屋に入った。すでに鑑識があちこちら調べている。

中央には長テーブルが置いてあり、周りを壁伝いにパイプ椅子が囲んでいる。遺体は部屋の左側、テーブルと道具の塊の間に倒れていた。それと線対称になるように部屋の右手前に血痕が残っている。こちらが先ほど救急車で運ばれた方が倒れていたのだろう。

「被害者の身元は？」伊勢はすぐそばにいた後輩の刑事、池田に話しかけた。

「この学生です」当たり前ですよね、といった様子で話す。「二年生で名前は高木祐介。財布の中に免許証が入っていました」

「へえ、免許持ってるのか」

「はい、車の鍵が入っていました。所持品は財布と車の鍵と家の鍵だけです。車は今探しているところですよ」

「それだけ？」

「はい」

「ふーん」

伊勢は死体にかかっているシートをどけた。頭の右側を殴られたようだ。額のあたりから出血がある、ということは正面から殴られた事になる。犯人と面識があったか、逃げる暇さえなかったか。

「凶器は……あれだよな？」

彼は死体の奥に転がっているバットを指差した。大量の血が付着している事からも間違いない凶器だろう。

「そうですね。部の備品ですよな？」

「だな。凶器を隠す必要がないわけだ。撲殺には持ってこいの場所だな。ちくしょう」

至極単純な事件だ。犯人は被害者二人がいる部屋に入り込み、そこにあったバットで殴った。それだけの事。ただ、合理的ではない。いつ誰に見られるか分からないような場所だ。しかし、今は気にしても仕方がない。

「死亡推定時刻は？」

「昨日の五時から七時の間頃です。詳しいことは検死待ちですけど、その時間なら何か目撃情報が見つかるだろう。あとは……」

「本当ですかね？」池田が聞いてきた。

「何が？」

「密室だったって。さっきの子言ってましたよね」

「さあな」

そう、まさにそこが一番の問題である。それさえなければ簡単な事件だ。単純に犯人が鍵を掛けていったのではないのか。もっと詳しい話を聞く必要がある。伊勢は猪狩たちに話を聞くことにした。

「ほんとに鍵ねえの？」藤井は疑いの目を本田に向けた。三人はサークル会館の入り口にいた。そこには長椅子が置いてあるのでそこに座っていた。二階から降りてきた学生が、興味深そうに野球部の部室の方に目を向けるが、警官に追いつ返されている。

「知らないよ、そんなの」

「ふーん」

どうも藤井はいつもの調子ではない。それきり黙ってしまった。

伊勢がこちらに歩いてくる。

「詳しく話を聞きたいんだけど」伊勢は猪狩に向かって言った。会うのは二回目だというのになぜか言葉遣いが砕けている。

「何もありませんよ」猪狩は別に気にするでもなく応答した。「部室に行ったら鍵がかかっていた。仕方ないから学務課で鍵を借りてきた。開けてみたらあの光景。それだけです」

「そういえば野球部なの？」

「いや、本田君だけです」猪狩は手のひらを上に向けて本田の方を示した。「こいつが急にキャッチボールをしたって言い出したんです。グローブを借りに行っただけです」そうやって今度は藤井を指さす。

「密室だったっていうのは？ 鍵は？」

「何年も前からないらしいですよ」

「ふーん」伊勢はメモを取り終わると頭をかいた。

正真正銘の密室殺人ではないか。犯人は何らかの方法で外から扉の鍵を締めたことになる。もしくは窓か。

「被害者のことは知ってる？」

「いえ、全然」

今度は藤井に顔を向けたが藤井は首を横に振るだけだった。今度は本田のほうを見て少し考えた後、

「野球部は後日また話を聞きます」と言った。「じゃあ次は、形式的な質問。昨日の五時から七時の間どこにいた？」

「家にいました」と猪狩。

「俺もです」藤井も続いた。

「俺は六時からバイトでした。駅前のK書店です」と本田。

「わかった。今日はもういいよ」そう言って伊勢はまた部室の方へ向かって行った。

猪狩と藤井は意気消沈している本田を送り届けた後JRに乗った。彼ら二人は隣のS市から通っている。

藤井はやはりいつもの調子ではないようだ。ずっと黙っている。前回の事件ではもっと積極的ではなかっただろうか。野球部だっただけあって、事件を身近に感じているのだろうか。被害者の二人と試合をした事があるかもしれない。

とりあえず、

誰かさんが動き出さない事を祈ろう。

猪狩は切実に祈った。

無駄だろうけれど。

二章 思索する火曜日

1、
結論から言うと猪狩の祈りは思ったとおり無駄になった。翌日、猪狩が奈美香に会って最初に聞いた言葉は、

「聞いたわよ」だった。

今は二講目が始まる少し前。猪狩と奈美香は第二外国語がドイツ語で一緒のクラスである。猪狩が終わりきっていない宿題を終わらせようと机に向かっていたところ、奈美香がやってきたのである。

「何の話？」猪狩は無駄だと知りつつも、悪あがきでとぼけてみる。何より、宿題がやりたい。ちょうど、名詞の性と冠詞の格変化に手間取っていた所だった。何故、古代のドイツ人は物に男性だの女性だの、はたまた中性だのをつけたのだろう。それはフランス語などの多言語にも言える事だったが。

「野球部で殺人事件があったんでしょ？」

「へえ」

「とぼけても無駄よ。あんた第一発見者でしょ」

「なんで知ってるんだよ。それに正確には殺人と殺人未遂だ」

「私の情報網をなめないでくれる？」

確かに彼女は顔が広い。〇大の三人に一人は彼女と知り合いで、さらに三人に一人は彼女が知らなくとも彼女を知っている者だという噂がある。本当かどうかは分からない。なにせ藤井から聞いた話である。どちらにせよ彼女には知り合いが多い。

「どうだったの？ 密室だったんでしょ？ 窓は、ちゃんと見た？

合鍵は？」

なぜか密室のことまで知っているようだ。目撃者は猪狩と藤井と本田の三人だけのはずである。野次馬はいたかもしれないが、密室の事までは知らないはずだ。本田と繋がりがあるのだろうか、もしくは本田の彼女とかもしれない。そもそも本田に彼女がいるのか。

もしくは藤井が喋ったのかもしれない。などと猪狩は考えた。とりあえず、藤井だったら一発殴ってやろうと決めた。

「窓は鍵が掛かっていたし、鍵は何年も前からなくなってる。」うんざりした様子で猪狩は言った。「そして一番大事な事が一つ」

「なに？」奈美香は興味津々で身を乗り出してきた。

「俺は何も考えたくない。警察の仕事だ」

猪狩は思いつきり奈美香に頭を叩かれた。

「いてっ！ 何すんだよ！？」

「別に」奈美香はそっぽを向いて自分の席に行ってしまった。

2、

奈美香は苛々していた。

まったく、あいつときたら！ なんでも警察の仕事だって！

身近に人が死んで、密室だって騒いでいたら不謹慎かもしれないけど、それで事件が解けるならいいじゃない！

現にあいつは事件を解いた事があるんだから。

……まあいいや。あとで現場を見に行こう。

そう思っただけ奈美香は授業に集中する事にした。

昼休み、奈美香はサークル会館に来ていた。来たのはいいものの、もちろん野球部に部室は立ち入り禁止である。仕方ないので隣のサッカー部の部室に入った。つくりは同じはずだ。勝手に入ってもまあ、何とかなるだろう。

サッカー部の部室は側面に棚が置いてあり、私物が乱雑に入れられている。その反対には黒板が設置されていて、連絡事項よりも落書きが多く見て取れた。それでも部屋全体としてはかなり整頓されている。壁の隅に紐が張られておりタオルなどが干されている。

「鍵が本当になかったとすると……」

奈美香は窓の方に近づく。

「ドアよりは窓の方が閉めやすいわよね」

一番想像しやすいのは糸を使った方法。ただ、糸が通りそうな、例えば通気口などはない。

「でも、ないなら作れば……」

窓ガラスに小さな穴をあければ、気づかれにくいだろう。もしくは、左右の窓の間に糸が通るように隙間を作れば……それこそ自然に欠けましたとでも見えるように。

「……………」

今度はドアの方に向かう。

「こつちは難しそうね……………」

扉は金属製でしっかりした造りだ。隙間などないし、作れそうにもない。こちら側には窓はない。

こちらを外から鍵を掛けるには（鍵が本当になると仮定して）機械仕掛けしかないだろう。しかし、文系大学にそんなものを造れる人物がいるとは到底考えられない。

「ああ、現場が見たい……………」

とりあえず奈美香はサッカー部の部室から出た。誰かが来る前に出ておかないとまずい。

なんとなく野球部の部室を覗こうと試みる。入り口に立っている警官が迷惑そうに奈美香のほうを見ている。中から若い男が出てきた。二十代後半だろうか。

「何か必要ですか？ まあ、ちょっと難しいですけど」

マネージャーと思ったのだろうか、男は奈美香に対し、申し訳なさそうな表情を作った。柔らかい感じのする、紳士的な男だ。

「あ、いえ、そういうわけじゃ……………」

「困るなあ、部外者が入ってきてちゃ」男は顔をしかめた。

「すみません……………」奈美香は頭を下げる。「あの、窓に小さい穴があいてたりしませんでしたか？ もしくは窓に隙間があったりとか……………」

男は目を見開いて奈美香をじっと見た。そして、声を出して笑い出した。

「あ、あの……？」怒られると思った奈美香は拍子抜けしてしまう。
「ああ、いやごめん。もしかして矢式奈美香さん？」

「え？ はい……。なんで知ってるんですか？」

「勘。いやあ、そうかそうか……」男は一人で納得している。「窓に細工されていた様子はないよ。隙間もないし。一般人にはこれくらいしか教えられないよ」

「あ、そ、そうですか」ダメ元で聞いてみただけだが予想外にすんなり答えられたので調子を崩してしまった。「すみませんでした。失礼します」

奈美香は一礼すると立ち去ろうとした。後ろから男の声がした。

「猪狩君にもよろしく」

奈美香はもう一度驚いてしまった。

3、

「伊勢さんだな、たぶん」

放課後、猪狩と奈美香、怜奈は一緒のJRに乗っていた。猪狩が一人で帰ろうとしたところを奈美香に見たという次第である。奈美香に昼休みの出来事を聞かされた猪狩は、手短かに説明した。あまり思い出したくない出来事であり、奈美香や怜奈も一緒に体験した事だったので多くは語らなかつた。

「なるほど、そういうことか」奈美香は納得したようだ。

「また、密室殺人？」怜奈は苦笑いした。

怜奈も今回の事件の事を知っていた。自分たちのグループにいる限り（奈美香がいる限り）いずれは知れる事だ。というよりは、すでに大学の人間の大半は噂程度であれば知っているだろう。こんな大事件が、騒がれないはずがない。

「殺人と、殺人未遂。一人は死んでいない」

「そうだったね」

「密室の謎っていう観点で見れば一緒だけどね」と奈美香。

「条件が違う。中に生きた人間が一人いる」

「じゃあ何？ 人を殺して、中から鍵を掛けて、自分を殴って気絶したっていうの？」

「条件の話をしたただけだ。出血がひどかったから、気絶してたのは間違いないだろう。少なくとも自分ではできない。そもそも、俺は密室が嫌いだ」

「どういう意味？」 怜奈が首を傾げる。

「利点がない」

怜奈は余計に首を捻る。

「もし、推理小説が生まれた頃、つまり科学捜査が発達していなかった頃に、本当に小説みたい密室殺人が起きたとしたら、密室の謎を解かないと犯人を捕まえられないかもしれない。けど、例えば、今の時代にどうやったか分からないような完璧な密室殺人が起きたとする。どうやってても密室の原理を証明できないとする。けど現場に落ちていた凶器から、犯人の指紋が出てきたら？ 被害者の爪から犯人の皮膚が検出されたら？ 犯人の毛髪が発見されたら？ 密室は何の意味を持たないんじゃないか？」

とは言ったものの、猪狩はどうすれば殺人として立件されるかは知らなかった。どうやったかが分からなくても物的証拠があれば良いのだろうか。

「間抜けな犯人ね」 奈美香が笑いをこらえている。「痕跡を残さなければいいじゃない」

「もし、痕跡がなければそれこそ密室にする意味がない。何も証拠がないんだから捕まる心配はない」

「うーん」 怜奈も奈美香も猪狩に言い負かされた形になって何も言えないようだ。

「でも、実際に起こってるじゃない」 そう言ったのは奈美香のほうだ。

「そう、わけがわからない。密室の原理も、密室にした理由も」

「うーん」 奈美香は考え込んでいる。そして、何かを思いついたように、「そうだ！」と言った。「明日、南原君のお見舞いに行きま

しよー！」

「は？」と言ったのは猪狩。

「いいね！」怜奈は乗り気だ。

猪狩は深くため息をついた。

三章 見舞いする水曜日

1、
次の日、三人は南原の入院している病院にいた。結局猪狩が言い負かされた形になって、付いてきた。藤井も誘おうと思ったが、見当たらなかった。

院内を歩く。消毒液の臭いがきつい。そこらじゅうで看護婦、今の時代は看護師と言った方がいいのだろうか、彼ら、彼女らがせわしなく動き回っている。

「あ、ここだ」

怜奈が南原の病室を見つけた。

「そう言えば、南原だっけ？ 知ってるのか？」猪狩は奈美香に向かって聞いた。

「いや、全然」奈美香はきっぱりと言った。「大丈夫よ。何とかなるから」

猪狩はため息しか出なかった。見ず知らずの人間がお見舞いに来たらどう思うだろうか。重い足取りで病室に入った。

「あ？」

そこには藤井がいた。

「何やってんだ？」

いないと思っただら先に来ていたのか。よくよく考えれば彼には野球という接点がある。

「何って、お見舞いだよ。見りゃわかるだろ。おまえらこそ何してんだよ？」

「何って、お見舞いよ。見ればわかるでしょ」奈美香が言い返した。「えっと、矢式さん……だっけ？」そう言ったのはベッドで半分身体を起こしている、南原だった。さすがは奈美香、顔が広い。〇大生の三分の二は彼女を知っているという噂があるが、二年生に限ればほぼ百パーセントではないだろうか、と猪狩は常々思っている。

「はじめまして、よく知ってるわね」奈美香は軽く挨拶した。猪狩と怜奈も軽く紹介する。

「で、はじめましてなやつらが何しに来たんだよ？」

「いいじゃない、迷惑かしら？」奈美香は南原に向かって聞いた。

「いや、全然。来てくれてありがとう」南原は微笑みながら言った。

「大丈夫なの？ 何があつたの？」

「もう大丈夫だよ。殴られたんだよ。知らないやつに」南原は少し顔をゆがめた。

「顔を見たの？」

「いや、目出し帽っていうの？ そういうの被ってて、見えなかつた」

「二人しかいなかったの？」

「ああ、部活は午前中で終わってたんだ。けど、バッテリーで話し合おうって事になって。まあ、一回帰ったんだけど、もう一度行つたわけ」

「ふーん」奈美香は何か考えているようだ。

「何を話し合ってたの？ てか、何で？」怜奈がふと沸いた疑問を口にした。

「え？ ……話さなきゃダメ？」南原は何か渋っているようである。初めて会った人間なのだから当然といえば当然であるが、話せないような後ろめたいものなのだろうか。

「いや、全然。自分で調べるから」彼女は笑顔で言つてのけた。これが怜奈の恐ろしい所である。行動力と図々しさは奈美香がピカ一だが、情報収集では、怜奈の方が一枚上手かもしれない。その上、そのせいで悪意なく人を傷つける事がある。悪意はない。猪狩はそう思っている。

ないはず。

多分。

恐らく。

そうでなければ一年半かけて形成した新川怜奈という人物像を作

り変えなくてはいけなくなる。その心配はないだろうが、そう思うくらい酷い結果をもたらした事もある。稀ではあるが。

「わかったよ」それを知ってか知らずか、南原は観念したように両手を広げた。「まあ、みんな知ってるしな。ケンカっていうか、あいつ、いつも練習テキストにやるからキツく言っただよ。いつもの事だから、監督が痺れを切らして雷落とされた。で、さすがにヤバイから、この先どうするよって話を」

「ふーん」彼女は満足そうに頷いている。

「あれ、君ら何してるの？」猪狩たちの後ろからさらに声が聞こえた。

そこにいたのは伊勢だった。

「何って、お見舞いですよ。見たらわかりませんか？」猪狩が言った。

2、

遡る事数十分、伊勢は南原の入院している病院にいた。今日から面会が許されるということで、彼に事情聴取に来たのと、彼の担当医に話を聞くためである。まずは、彼の担当医に会いに行った。あの程度、彼の状況を聞いた後で一番聞きたかった事を切り出した。

「彼が本当に気絶していたかどうかわかりませんか？」

密室という状況を作るにおいて、一番手っ取り早い方法である。中から閉めればよい。ただ、そうすると彼の怪我をどうやって作ったか、という問題に直面する。それにまったく理にかなっていない。それでも、とりあえず考えられる方法を片っ端から片付けるしかない。これはその一つである。

「うーん、傷口からして、あれで平気というのはありえないと思います」

「わかりました。失礼します」

続いて、南原の病室に向かった。やっと詳しい話を聞くことができる。何か進展があるといいが……。

病室の前で、伊勢は一度立ち止まった。どうやら見舞い客が来て

いるようだ。申し訳ないが、退いてもらおう。何せ、こっちは仕事である。

「あれ、君ら何してるの？」

知っている顔がいるとは思っていなかったもので、思わず声に出してしまった。病室にいた皆が振り向く。そこには猪狩康平と矢式奈美香がいた。あとの顔は知らなかった。

「何って、お見舞いですよ。見たらわかりませんか？」猪狩が言った。なぜかその場の全員がクスクス笑っている。自分が何をしたというのだろう。

「まあ、そうだろうね。で、悪いんだけど席を外してくれるかな？ 仕事なんでね」腑に落ちなかったが、気持ちを切り替える。

「わかりました」

「ちよっと！ 私たち来たばかりなのに！」奈美香が不満を言った。

「ほら、帰るぞ」そう言ったのは藤井だった。「じゃあな、南原」

「ああ、今日はありがとう」南原はそう言って、手を振った。

猪狩たちが去って、伊勢と南原だけになった。

「さて、道警の伊勢といいます」伊勢は手帳を見せながら言った。

「どうも」南原は軽く会釈する。

「さっそくで申し訳ないんですが、事件当日の事を聞かせてもらえませんか？ 話によると午前中で練習は終わったそうですが」

「はい、けど二人で話し合おうって事になったんです。ぼくら、ピッチャーとキャッチャーなんです。監督に言われたんですよ。僕ら、馬が合わないっていうか、それで監督に怒られちゃったんです」南原は苦笑いしながら、説明する。

「何時に会う予定でしたか？」

「四時です。メールで決めたんですけど」

確かに、被害者の携帯電話に履歴が残っていた。間違いはないようだ。

「野球部員は全員、あなたたちが集まる事を知っていましたか？」

「さあ？ 知らないんじゃないですかね？ 監督が話し合えつつたんで、何人かはその話を聞いていたかもしれないですけど。」
「わかりました。次は襲われたときの状況を教えて下さい。まず、何時頃でしたか？」

「うーん」南原は手を顎に当てて考える仕草をする。「よく覚えていません。結構経つてはいたと思うんですけど、部室の時計が止まっていたんで」最後にすいませんと頭を下げる。

「わかりました。では、どんな状況でしたか？ 辛いとは思いますが、できるだけ思い出してください」

「部室で話してたら、急に入ってきたんですよ。目出し帽で顔を隠してたんですけど、男っぽかったです。で、その場にあったバットで殴りかかってきました」

伊勢は部室に入り口のすぐ近くに大量のバットがビール瓶のケースに入れられていたのを思い出した。

「先に襲われたのはどちらですか？」

「僕です」

「犯人の特徴などは覚えていませんか？」

「ほんとに一瞬だったんで……。身長は大きくも小さくもなかったような気がします。男だったらすけど」

「わかりました。今日はこのくらいで失礼します。またお話を聞く事があると思いますが、ご協力お願いします」そして、伊勢は病室を去った。

結果は想像の範疇。あまり成果は得られなかった。結局軽くならなかった足取りで、彼は署に戻った。

四章 拡大する木曜日

1、

「まあ、正直言つとみんなそうだな」本田が言った。

翌日の食堂、いつもの四人と本田で昼食を食べていた。事件の話になり、奈美香が、高木と仲の悪かった者を聞いた所である。

「あのバッテリーには多少なりみんなイラついてたな」

「南原にも？」藤井が驚いたように言った。

「高木はI高の二番手ピッチャーだったんだ」

I高といえば市内有数の野球校で何度か甲子園にも出場している名門である。進学校としても有名で、特進クラスの進学先は、ここO大やH大なども入る。ただ、野球部に特進クラスの者が少ないのは容易に想像がつく。高木はその稀有な存在だったのだろう。

「で、調子に乗ってたわけ。練習しないし、俺らに文句ばかり言うし。そんなわけだからキャッチャーの南原ともめてたな。南原は南原でうるさいんだ。真面目なのはいいんだけど、見境なしに高木と喧嘩するからさ」

「みんな彼らのこと煙たがってたわけね」奈美香が頷きながら言った。

「おい、俺らを疑ってんのか！？ 勘弁してくれよ！ それくらいで殺すわけねえだろ！」

「わかってるわよ」そう言つて奈美香は考え込む。何かを考え付いたわけではないようだが。その証拠に頭を振つてため息をついた。しかし、ふと思ひ出したように口を開いた。「あ、そういえば高木くんって結構いい車に乗ってたのね」

「そうなの？」そう聞いたのは意外にも本田だった。

「学生にしては、ね。車の事よく知らないから、車種とかは分からないけど。知らなかったの？」

「あいつ、駐車場の許可証持ってないんだ。だから、車は見た事な

いよ」

「誰か知ってたやつはいる？」今度は猪狩が聞いた。

「いないんじゃない？ あいつが車持ってたなんて話聞いたことないから」

野球部が知り得ない事を、なぜ奈美香が知っているのか。猪狩は奈美香の情報収集力の恐ろしさを思うと背筋がぞつとした。やはり、矢式奈美香、新川怜奈の二人を敵に回すべきではない。ふと、食堂では普通見ることのない人物が視界に入った。

「あ、伊勢さん」猪狩が指を差した。その先には、学食の会計をしている伊勢の姿があった。捜査の合間を縫って食堂に来たようだ。

「いい事考えた！」奈美香が元氣よく言った。

「あ？」

「レッツ・ゴー！」そう言って、猪狩の腕をつかみ、伊勢の方へと向かう。

「な！？ ちょっと待て！」

「……行っちゃった」怜奈がつばやいた。

「伊勢さん！」

「ん？」伊勢が顔を上げる。

「こんにちは」

「ああ、君たちか。どうしたんだい？」伊勢は微笑むと、椅子に腰を下ろした。

「誰ですか？」伊勢の隣にはすでに一人の男が座っていた。細身で、あどけなさの残る顔。いかにも新米刑事という印象を醸し出している。

「ああ、池田。お前、腹痛くないか？」

「へ？ いえ、痛くないですけど……」

「痛くないか？ 痛いよな？ トイレ行ってきていいぞ」伊勢が池田に向けた視線はなぜか冷たい。自分は何故か怒られている。そう思ったのだから、声を上ずらせて返事をする理由もわからずトイレ

レに走り出した。

「さて、と」

「捜査は進んでますか？」

「いや、全然」彼は顔をしかめて手を振った。「目撃情報があるかと思ったら、からつきし。日曜のあの時間ってどの部活も大してやってないんだね。だから犯行が行えたんだらうけど」

「他はどんな感じですか？」

「そりゃあ、一般人には教えられないよ。教えたら面白そうだけど」「え？」

「いや、なんでもない」伊勢は笑っている。後輩刑事を追いやっておいてそれはないだらう。とはいえ、本来は些細な情報も漏らしてはいけないのだらう。

「車からは何か出てきました？」猪狩が尋ねた。よくよく考えれば、野球部が知り得ない事を知っているのは、警察が調べているのを目撃した以外にありえない。こういう、偶発的な情報は怜奈より奈美香の方が多い。

伊勢は少し驚いたようだが、すぐに答えた。

「全然。まあ、これくらいなら言ってもいいか……。携帯が見つかって、彼らがあそこに集まる予定だったって事の裏が取れたってくらい」

「あそこの鍵っていつから無いんですか？」今度は奈美香が尋ねた。「ん？ えっと」そう言っ手帳を見る。「ああ、平成十一年ってなってるね。ちょうど十年前だ。これくらいしか教えられないな」そう言っ。伊勢は微笑んだ。

「そろそろ飯を食わせてくれない？ この後も仕事だから」

「あ、すみません」奈美香が頭を下げて謝った。

「いいよ。それじゃ」彼は片手を挙げて挨拶した。二人はそのまま食堂を出て行った。

「……池田、遅いな」池田のエビフライをほおばりながら、彼はつぶやいた。

2、

「もう、全然わからない」奈美香は落胆の声をもらした。

放課後、猪狩と奈美香は坂を下っていた。駅まで歩いて二、三十分。そこから電車に揺られて四十分。さらに地下鉄に乗り換えて十分。それから歩いて二十分。実際は自転車があるので十分かからないくらいだが、考えただけで憂鬱になる通学時間である。

「何が？」猪狩はわかりきっている事を聞いた。

「事件の事に決まってるでしょ！」

奈美香は強い口調で言った。かなり苛立っているようだ。漫画だったら青筋が立つか頭から湯気が出ているだろう。それでお湯が沸かせるかもしれない。

「どこまで知りたいの？」

「え？」

「密室の謎が解ければいいのか、犯人がわかればいいのか。犯人が知りたいんだったら、今の状態じゃ無理だろ。野球部の事を知らないんだから」

「あんたじゃないんだから、野球部の事くらいわかるわよ。でも、

そうね。明日からは野球部の人たちに話を聞いてこようかしら」

「いつてらっしゃい」

「あんたも行くのよ！」

猪狩は深いため息をついた。その時、一台の原付が彼らの横を通り過ぎて行った。

「あれ、本田じゃん」

「いいなあ、あれなら駅まで十分もかからないのに」今度は奈美香がため息をついた。

「七、八分つてところだろうな」

「いいなあ」ちょうど体育館の横に来た。

「あ、あれよ。高木くんの車」そう言って指を差す。

なるほど、と猪狩は思った。インプレッサWRX。学生ではなか

なか買えないだろう。あの車はどうなるのだろう？ 持ち主がなくなつて四日、ずっとこの駐車場に停めてある。

「さて、帰るか」どうせレッカー車で運ばれていくのだろうと結論付けて歩き出した。

3、

その夜、猪狩は家の近くのコンビニへ出かけた。課題レポートをやっていたら眠くなつてきたので、コーヒーを買いに行くところだった。その途中で、ジャージ姿で走っている人物を見かけた。

「あれ、山本？」みた事のある顔だった。

「あ、猪狩か」

山本高志。〇大の二年生で野球部。猪狩と中学が一緒で、猪狩の知っている唯一の野球部員である。と言つても大して仲が良いわけではなく、あまり話した事はない。

「何やつてるんだ？」

「見てわかんない？ ランニングだよ。大会近いしさ。三年生にピッチャーいないんだよ」

「ふーん」

「ほら、高木があんな事になつちやつただろ？」そう言う山本の表情は暗い。「大会辞退しようかつて話もあつただけど、高木の分も頑張ろうつて……」

「高木と仲良かったの？」我ながら滑稽な質問だと猪狩は思った。同じ野球部なのにその質問はいかがなものか。ただ、昼間の本田の話聞いていたので、つい尋ねてしまった。

「あいつは、俺の手本だよ。そりゃ、性格は悪かつたし、嫌つてたやつも多いだろうけど。あいつ、I高なんだ。エースじゃなかつたけど、二番手で投げてて。いっばい学ぶ所があつてさ。あ、俺もう行かないと」

「ああ、頑張れよ」

そのまま山本は走つていった。猪狩も歩き出した。

「あ」

コンビニに行っていない事に猪狩が気づいたのは家の前に戻って
からだった。

四章 拡大する木曜日（後書き）

実は車の事はよくわかりません笑。先輩が持っている車を出してみました。

第五章 脱線する金曜日

1、
「あ、康平」昼の食堂。奈美香が猪狩の方を見て手招きしている。
「何？」

「野球部のマネージャーの結城さん。三年生で南原君の彼女」奈美香は自分の向かいに座っている女性を示す。

すらっとした体型で女性にしては背が高い。ショートカットがよく似合っている。こういう人を魅力的な女性と呼ぶのだろう。猪狩は黙って頭を下げる。

「奈美香ちゃんの彼氏？」

「ちよつと里美さん？」奈美香が低い声で言った。慌てる様子もなく、根っから否定しているようである。むしろ慌てられても困る。こっちから願い下げだ。

「なんだ違うのか」結城里美は悪戯っぽく笑った。

「事件を解く探偵役ってどこですかね」

不本意ながら、とつぶやくのが聞こえた。不満があるなら自分が見ればいだろう、と猪狩は思う。だが、奈美香は目を細めて猪狩を見ている。もっとやる気を出せ、という威嚇のようだ。

「うっそー」

「嘘です」猪狩がきつぱりと言う。奈美香は猪狩を横目で睨む。

「まあ、いいや。何が聞きたいの？」

「事件の日。何か変わった事なかったですか？」

「って言われてもねえ……。あの二人、監督にこっぴどく怒られてたけど」

「らしいですね。二人が話し合うこと、知ってました？」

「いや、全然知らなかったの。出かけるときも、いつの間にかいなくなってたし」

猪狩が何のことだかわからないでいると奈美香が「南原くんと里

美さん、同棲してるのよ」と耳打ちしてきた。

「ただ、監督がすつごい怒ってて『おまえら、一回腹割って話し合え!!』って言うってたから」

「じゃあ、誰か聞いていたかもしれないですね」

「まあね。あとは特にないなあ。ごめんね」

「いえ、いいですよ」

「南原は携帯持って行きましたか？」猪狩が唐突に聞いた。

「え？ ああ、忘れていったのよ。なかなか帰らないから電話掛けたっけ、すぐそこで鳴るんだもん。びっくりしちゃった」

「監督って、この教授ですか？」猪狩は質問を続ける。

「いや、野球部のOBなの。キャプテンだったんだって。自営業で土日の融通が利くから、やってもらってるの」

「何年卒ですか？」

「いつだったかなあ？ 十年くらい前だったと思うけど」

「ありがとうございます。もういいです」そう言うと猪狩は立ち上がって食堂を出て行った。奈美香が後からついてくる。

まだ、次の授業には時間がある。なぜか猪狩は授業棟とは反対の方向に歩いている。

「ねえ、携帯がどうしたの？」

「どうも。あ、そうだ。カジノ・ロワイヤルって見た？」

「何それ？」

「007だよ。何年か前の映画なんだけど」

「そんな、おじさんが見るような見ないわよ」

「ああ、そう？ てか、それ偏見だろ。面白いと思うぞ。今回はいろいろ新しい試みがあってマンネリ化したシリーズから抜け出してるっていうか、批判が多かった新ボンドもかなりの評価を受けたし。特に印象に残ってるのは、最後にボンドがヒロインを追っかけていく所かな。ポーカーの所とかって言う人もいるだろうけど。とにかくいい作品だよ。と言っても実は前の俳優の作品の方が好きなんだけど」

「で？」奈美香が苛々しながら聞いた。

「いや、それで終わり」

「事件との関係は？」

「ないんじゃない？　いてっ！！　何するんだよ！」

「別に」奈美香は猪狩の頭を叩いた後、そっぽを向いてしまった。

「康平」理不尽な暴力に猪狩が不満を募らせていると藤井がやってきて話しかけてきた。「明日、暇か？」

「暇だけど、何？」

「野球部の試合見に行こうぜ」

「何だよ、急に。別にいいけど」

「オツケー。じゃあ、明日九時に迎えに行くわ」

藤井はそのまま食堂の方へと向かって行った。

「で？」奈美香が声を低くして言った。

「何が？」

「だから、事件については？」奈美香はかなり苛々している。

「いや、だから何も無いって。あ、そうだ。象を冷蔵庫に入れるにはどうしたらいいと思う？」

奈美香は気が重くなった。頭に何かが乗っている気分だ。どうしてこいつは、こいつも掴み所がないのだろう。いきなり関係のない話を始める。

「そんなの知らないわよ。小さく切って入れるんじゃないの？」

「違うよ。答えは冷蔵庫のドアを開けて、象を入れて、ドアを閉める。だよ」

「呆れた」奈美香はため息をついた。

「じゃあ、キリンを冷蔵庫に入れるには？」

「冷蔵庫のドアを開けて、キリンを入れて、ドアを閉める」彼女はぶっきらぼうに答えた。

「残念。冷蔵庫のドアを開けて、象を出して、キリンを入れて、ドアを閉める。だ」

「何それ」もうすでにまともに取り合っていない。

「知らないよ。それが答えなんだから。けどさ、象が入るほどの冷蔵庫を想定しているのに、なんで象とキリンが一緒に入る大きさは想定してないんだらう。どっちもありえない大きさなのに。どうして象とキリンと一緒に冷蔵庫に入れちゃいけないんだらう？」

「知らないわよ、もう」奈美香はどうでもいいわよ、という様に肩をすくめた。

「あ、そう。じゃあ、俺寄る所あるから」そう言つと踝を返して坂を登って行った。行き先はどう見てもサークル会館。これは付いて行かないわけにはいかない。むしろ憑いて行くくらいの気持ちで。

「ちよつと、待ちなさい！」

「何してんの？」

野球部の部室に入ったと思つたら中を物色し始めた猪狩。事件に関係する事なのだろうか。いや、そうでないといういるとまずい気がする。自ら動き出した事に関しては評価してもいい。しかし、彼の行動はどうも意味のある事には見なかった。

「いや、別に。先帰つてもいいぞ」

「いやよ、そんなの」

不毛な会話をしている間にも猪狩は物色を続けるが、窓や扉には目もくれない。

椅子に登り、合宿用であろう料理道具の入った袋をガサゴソ。バットの一本を取り出し、ポーッと見つめる。

冷蔵庫を開けると、二リットルのペットボトルを取り出し、すぐに戻す。

救急箱を見つけては中身を漁り、その他奇行をいくつか成した後、「あほらし。帰ろ」そう言つて猪狩が出て行ってしまった。

「……はあ？」

奈美香が漏らしたそれは、非難めいたものではなく、心底の呆れから出たものだった。

「てか、授業……」

2、

猪狩はその日の夜〇大野球部のホームページを見た。部員紹介の所をクリックすると部員の一覧が出てくる。名前をクリックすると、その人の詳細を見る事ができる。

猪狩はまず一番上の監督の名前をクリックした。

安田久 昭和五十二年五月二十一日生 三十二歳

平成十二年卒 当時はキャプテンで四番センター。五年前から指揮を取る。

「ちょうど十年前か……」

続いて他の部員の名前もクリックしていく。ほとんどわからないので会った事のある者だけ見ていく。

高木祐介 二年生 平成元年八月五日生

I 高校 右投右打 投手

〇大が誇る二年生エース。自慢の速球で相手を手玉に。

南原信也 二年生 平成元年十月十四日生

H 高校 右投右打 捕手

頭脳明晰、チームの司令塔。シユアなバッティングも期待。

本田圭介 二年生 平成元年四月三日生

K 高校 右投左打 内野手

チビで俊足。とにかく足が速い。気づいたら走っている。先輩に追いかけて……。。

山本高志 二年生 平成二年二月十一日生

A 高校 左投左打 投手

モットーはのりくらり。のんびりしながらも、ちゃっかり抑えている。

結城里美 昭和六十四年一月七日生

T 高校 マネージャー

チームを影で支える（支配する？）マネージャーの長。マネージャーはおろか選手でさえも逆らえない。睨まれたが最後、手足の震えが止まらない。

「……………」猪狩はパソコンをシャットダウンして、寝た。

五章 脱線する金曜日（後書き）

僕はピース・プロスナンが一番好きです。

第六章 野球する土曜日

1、
「まだ、九時だよ」猪狩は眠そうな目を擦って言った。
「九時に迎えに行くって言ったろ」

藤井は約束どおり九時に猪狩の家に迎えに行った。彼は車で来ていた。彼の車はWILL VS。一人暮らしのくせに、一丁前に普通車だ。維持費が高いだろうに。大学中は軽自動車でいいと思ってる猪狩だが、今のところそれすら叶っていない。

猪狩は一応時間には間に合っている。九時には準備を済ませ待っていた。ただ、猪狩は朝にめっぽう弱い。休日の九時はまだ時間外である。

H大のグラウンド。そのすぐ横に車を停める。H大はかなり広いので、構内を車で移動しても何らおかしくはない。学生たちも、ほとんど自転車に乗って移動している。途中で藤井が、免許を取ってから初めて巻き込み確認の必要性を感じた、と言い出した。それほど容赦なく自転車が車のすぐ横を走っていた。グラウンドはその構内の端にある。外野の奥は木が生い茂っており、ボールが入っていたら、まず探すのは難しいだろうな、などと眠い頭で猪狩は考えた。

「まだ、試合前じゃん」

「ああ、十時プレーボールだから」

「……あと三十分寝られた」

「そのくらい気にするな」

猪狩は辺りを見渡した。野球部員がウォーミングアップをしていた。ベンチではマネージャーが試合の準備をしていた。その中に頭に包帯を巻いた南原が目についた。

「南原」藤井も彼に気がついて声をかける。

「おう、藤井か。猪狩も」

「大丈夫なのか？」

「ああ、普通にしてる分にはな。試合には間に合わなかったけど。ま、見ていってくれよ」

シートノックが始まり、南原がベンチから出てきた。

「今回ベンチ外なんだ」

グラウンドではO大の選手が声を張り上げてノックを受けている。

シートノックが終わり、両校の選手がベンチ前に集まる。審判の合図で一斉に走り出しグラウンドに整列した。キャプテンが握手をかわし、審判の「礼！！」の言葉で全選手が頭を下げ、声を張る。

「しゃーす！！」

O大の先攻で、H工大の選手が守備に着く。O大のベンチ前では円陣が組まれている。

「あれが監督か」

三十代くらいの男が円陣に混じって選手に檄を飛ばしている。長身で穏やかな表情をしている。顔と檄の言葉にギャップを感じる。

「あれで、キレたら恐いんだぜ」南原はおどけて、わざと身震いした。

O大の攻撃が始まる。一番はセカンドの本田。

「あいつは嫌なバッターだぜ。粘り強いし足が速い」

南原の言うとおり、ツーストライクから三球連続でファール。ボールをはさんだ後、レフト前に流し打ちでヒット。ベンチの後ろでマネージャーが歓声を上げる。

「な？」南原が満足そうに言った。

次の打者は猪狩の知らない人だった。南原がいうには三年生らしい。

その初球、いきなり本田が盗塁を試みた。結果はセーフ。

「な？」南原がまたも満足そうに言った。

打者が送りバントを成功させ、一死三塁。「三番レフト片山くん」

とコールがかかる。

「あいつは一年でセンスはあるんだけどな……」

片山は初球を打ち上げサードフライ。二死三塁となった。

「零点かな」藤井がつぶやいた。

「まさか」南原は首を振った。

打者のコールがかかる。「四番ファースト大西くん」

彼は左打席に入る。

「キャプテンは誰よりもバットを振ってるんだ」

一球目、外の変化球、ボール。

「自分が振らないと他の部員に示しがつかないってさ」

二球目、内角のストレート、ファール。

「何か青春野球漫画みたいだけど」そう言っただけで軽く笑った。

三球目、

「とにかくあの人は打つよ」

ストレートを引く張り打球はライトへ。鋭いライナーで、ライトの頭上を越えた。

「っしゃー!!」藤井が叫んだ。ベンチでも歓喜の声が聞こえる。

「な？」南原が言った。三度目である。

四番大西の二塁打の後、五番打者が倒れ〇大の得点は一点。

「なあ」藤井が遠慮がちに言った。「エースって高木だったんだろ？」

「まあな、今日は山本だな」

「どうなの？」今度は猪狩が聞いた。

「まあ、見てな」

H工大の先頭打者に対しての初球、右打者に対するインコースのストレート。

「そんなに球速くないな」藤井が言う。

二球目、今度はアウトコースへのストレート。打者はそれを強引に引っ張り、レフト前へ。無死一塁。

「ここからだ」南原が言った。

二番打者は素直に送りバントで、一死二塁。三番打者が左打席に入る。

「あいつは左打者には強いんだ」

「そりゃサウスポーだからな」藤井が当たりまえだと言わんばかりに言った。

「あそこまで左に強い左腕もめずらしいぜ」

などと言っている間に打者は外のスライダーで三振。二死二塁。

「高木はいいピッチャーだった」南原がふと口にする。

次は四番打者、右打席に入る。

「140キロは出なかつたけど、いい所までいった」

外のスライダー。ストライク。

「コントロールがいい訳じゃないけど、崩れなかつた」

外のストレート。ボール。

「山本は精々125だろうな」

インコース、ストリート。引つ張って大きなファール。

「けど、俺は山本に魅力を感じてるんだ」

「左だから？」藤井が首を傾げる。

「それだけじゃない」

山本の四球目。カーブ。しかしそれはいつまでも届かないようにさえ思えた。結局打ち上げてファーストフライ。0大は無失点で切り抜けた。

「あいつのカーブは無茶苦茶遅いんだ。80キロあるか疑わしい」

南原はけらけら笑っている。

「遅え……」藤井が苦笑した。

その後は膠着した展開となった。打ちつ打たれつ、それでいて得点に繋がらない。試合が動いたのは五回裏、H工大の攻撃。九番打者がエラーで出塁し無死一塁。そこから盗塁を試みる。捕手が送球をやや逸らしセーフ。

「俺ならアウトなのに……。何やってんだよ」南原がつぶやく。

無死二塁。一番打者は送りバント成功。一死三塁。捕手がタイム

を掛け、山本に駆け寄る。

「ここだな」藤井がつぶやく。

二番打者が右打席に入る。

「スクイズだな」と南原。

果たして、結果は本当にスクイズだった。が、山本が大きく外して失敗。結局この打者はサードゴロで二死三塁。次は左の三番打者。「ここで抑えろ！」藤井は必死になっている。

初球、大きく外れてボール。二球目は変化球でストライク。そして、三球目。

「あつ！！」誰かの叫び声が聞こえた。

山本の投じたボールは、打者の背中を直撃した。デッドボール。

「あちゃー！」南原は額に手を当て、天を仰ぐ。

そして四番打者。一球目だった。あのスローカーブ。うまく引き付けて一塁線へ。ファーストは捕れない、長打コース。

「あらら」藤井はため息を漏らした。

結果、二点タイムリーツーベースとなり、後続を抑えるも逆転を許す。一対二。

グラウンド整備にはいるその間両チームは円陣を組んでいる。

「落ち着いていこう」そう言ったのは監督。

「まだ一点だから。焦らずに少しずつ返していこう。流れが悪いからこの整備で一回切り替えてな。ちょうど一番からだ、初回のつもりでいこう！」

「はい！！」一斉に部員が返事をする。

ベンチの横で本田が何者かと話している。パイプ椅子に座って「H」の帽子を被っているがH工大の物とは違う。

「あれ、誰？ 何してるの？」猪狩は南原に聞いた。

「ああ、ボールボーイだよ。ファールボールとかを捕りに行くやつ。H大が当番校だからな。あいつは本田の友達って言うってたかな？ 工学部とか言ってた気がするけど、忘れた」

その後、何度かチャンスを作るも得点には繋がらず。山本も好投

するも、さらに一点を失い、一対三で〇大の負けとなった。

「まあ、いい試合だったな」と藤井。

「いや、でも勝ちたかった」南原は悔しがっている。自分は怪我で出ていないのだからなおさらだろう。

「帰るか」猪狩が提案する。

「おう、今日はありがとうな」南原は笑顔で応じる。猪狩と藤井の二人は駐車場へと歩き出す。

駐車場に行くとスーツを着た、グラウンドにふさわしくないような男がいた。もうこの一週間で見慣れてしまった。伊勢である。

「何してるんですか？」猪狩が尋ねる。

「野球しているように見えるかい？」伊勢は苛立たしく言った。

「捜査、進んでないみたいですね」

「もう、訳がわからんよ」

「睡眠薬でも出てきました？」猪狩がそう言うと伊勢は目を丸くした。

「あ、本当に？」意外そうに猪狩が言う。

「本当に出てきたよ。意味がわからん。何かわかったの？」

「いえ、全然」

「あ、そう」伊勢は猪狩を訝しげに見た。しかし、ため息をつくとそのままグラウンドの方へと向かった。

「苛立ってるな、あの刑事さん」

「そのうち何とかなるだろ」

「どうやって密室にしたのかな？それがわからないとどうしようもないんじゃない？」

「違うよ」猪狩は否定した。

「へ？」

「大事なのは『どうやったか』じゃなくて『なぜやったか』だよ」

「おまえ、何かわかっただろ」

「さあね」

七章 解決する日曜日

1、
日曜日、猪狩は九時に家を出た。休日だというのに二日連続の早起きである。もちろん猪狩にとっては、ではあるが。気分は良くない。

昨日の夜、伊勢から電話があった。聞きたい事があるから、来て欲しいとの事だった。休日は寝ていたかったし、仕事なのだからこちらに来て欲しい、いささか不満だったが、仕方ないので出かける事にした。

自転車で地下鉄まで向かい、街中へ向かう。駅から十分ほど歩くと目的地が見えてきた。高いビル、といっても周りも高いビルだらけなので目立つわけではない。何階建てだろうか、とりあえず気にせずに中へと入る。

受付で伊勢の名前を出すと場所を教えてくださいました。会議室のような所だろうか、猪狩はその扉を開けて、
閉めた。

「ちよつと、ちよつと!!」中から奈美香が飛び出してきた。

「お前だろ!!」猪狩はめずらしく怒りをあらわにしている。

「な、何よ!!」

「お前が藤井から聞いて伊勢さんに言っただろ!!」

「だって、犯人が分かったんでしょ?」

「単なる推測だ。集められた情報からそいつが犯人だったら筋が通ると納得できるだけだ。何にも根拠なんてない」猪狩は続ける。「それは単に自分を納得させる事ができるだけで、自己完結するものだ。それを言葉にして他人に発信した時点で、責任が発生する。その責任を俺は負う事なんてできない」

「犯人を野放しにしているの?」奈美香が静かに言った。

「そうは言っていない。警察の仕事だ」何度この言葉を繰り返しただ

ろう。そんな事を猪狩は考える。

「真相に気づいているのは康平だけなのよ!!」今度は奈美香が声を荒げた。いつになく、真剣な眼をしていた。好奇心で事件を追っているあの眼とは全然違う。

ああ、そうか。

猪狩は気づいた。

「人殺しであってもいいやつである事とは無関係だ」

そんな言葉が思い出された。

猟奇的に殺人を犯す者もいれば、そうでない者もいる。極端な例で言えば、家族を殺された恨み。もちろん、小説ではよくある事だが、現実ではあまり見かけない。なぜならば犯人はほとんどの確率で、警察に逮捕されるし、ましてや警察が知らずして、家族がその真相を知るなどまずありえない。ひとまずそれは置いておいて、何が言いたいかと言うと、前者は弁護士がよく使う「責任能力に疑問」などと言われるように、精神そのものに異常がある場合である。それに対し後者は「情状酌量の余地あり」など呼ばれるものである。その場合人殺しであるという事実とその人間の人格にはそれほど因果関係はないのではないか。

確かにそうかもしれない。だが、法治国家において、おそらくはそうでなくとも、殺人という行為は許されるものではない。たとえ殺した相手が鬼畜のような人間だったとしてもだ。裁く事ができるのは法のみであって、人は人を裁けない。

奈美香は知っているのだ。自分の見知った者の中に犯人がいる事を。

殺人は許してはならない。知り合いならばなおさらだ。知り合いでなくとも当然だ。

奈美香は救って欲しいのだ。間違ってしまった誰かを。正しい人格であるが故に。

猪狩は気づいた。奈美香がそう思っている事を。

猪狩はひと息ついた。ため息ではない。これは落胆の表れではない。自分を落ち着かせるものだ。

猪狩はドアノブに手を掛けた。

部屋の中央で長机がいくつが集まって正方形を作っていた。奥の辺には安田と本田が、右には結城と奈美香、左には南原と山本が、そして手前には伊勢が座っており、空席が一つある。猪狩はその席の前に立った。座ろうか迷ったが、どうせこれから喋らなくてはいけないのだからと思いついたままに立った。座ろうか迷ったが、どうせこれから喋らなくてはならないのだからと思いついたままに立った。

「何なんだよ!? いきなり呼び出して!」そう言ったのは本田。その言葉は明らかに猪狩に向けられていた。猪狩は今度はため息をついた。落胆のそれである。まさか自分が呼び出したことになっていたとは……。

「別に俺が呼び出した訳じゃないんだが。まあ、俺が喋らなきゃいけないのは間違いないさそうだな」

そう言って猪狩は伊勢のほうをチラツと見た。伊勢は苦笑いして肩をすくめた。それはどういう意味だろう、と考えた。騙して呼びつけた事への謝罪だろうか、それとも奈美香に押し切られたから自分は悪くないとも言いたいのだろうか。

「康平が、犯人が分かったって言うのよ」

奈美香が煽るように言った。猪狩は少なからず腹が立った。何を得意げに話しているのだろう。

「じゃあ、さつさと逮捕したら? なんで私たちが呼ばれたの?」

奈美香の横にいた結城が言った。

「俺が呼んだ訳じゃないんですけどね……。まあ、何と云うか、丁度いいメンバーですね。と云うか、話さなくちゃ駄目ですか?」最後は伊勢に尋ねた。無駄だろうと思いつつ。精一杯、懇願の意を込めながら。

「そうしてちょうだい」伊勢は微笑んで言った。その微笑みは何を意味するのだろう。猪狩は本日二度目のため息をついた。

「仕方ないですね……。では、あなたたちが呼ばれた理由を話すにあたって、少し事件について考えてみましょう」「目上の人もいるので敬語で話すことにした。」

「事件の概要はこうです。高木さんと南原くんがバッテリーの今後について話すために、部活の終わった後にもう一度部室に行きました。そこで、何者かが急に入ってきて襲われた」

猪狩はそこで一度、南原のほうを見た。

「そうだよ」

「これは物取りの犯行ではありません。当然ですが。何せ、財布は盗られていませんし、大体サークル会館の奥の野球部の部室に行くなんて馬鹿げています。と言うことはどう考えても犯人は野球部の人間ということになります」

そこまで言うとな場の空気が変わった。

「ちょっと待てよ！ 何だって俺らがそんなことしなきゃいけないんだよ！？ それにそうだとしても……」本田が叫ぶように言った。「そう、仮にこの中に犯人がいるとしてその人物を聴取すればいいだけです。けど、どうも推理小説の読みすぎなやつがいます、皆さんを呼びつけたようです」

そう言って奈美香の方を見た。彼女は舌を出して「あっかんべー」のポーズをとっている。先ほどの真剣な眼差しはどこに行ったのだろう。相変わらず、切り替えが早い。というより騙されたのだろうか。いや、どちらも本心だろう。矢式奈美香とはそういう人間である。

本田は奈美香を睨みつけている。いつもは温厚な彼だが、今回はかりは腹を立てているようである。

「ですから、手っ取り早く結論だけを言っても良いのですが、それだと納得しない人がいるでしょうから」と、もう一度奈美香を見る。今度はそっぽを向いて知らんぷりをしている。

「それなりに筋道を立てて説明しましょうか。」

現場は密室でした。ではどうやって密室にしたのか。よく推理漫画であるような糸を使った方法は使えません。見たところそんな隙間はありませんでした。

では、機械仕掛けだったのか。工学部の友人に頼んで作ってもらい、第一発見者となってそれを回収したのか「そうやって本田の方を見る。」

「なっ!?!」

「それとも十年前になくなった部室の鍵は、実は十年前のキャプテンが持っていたのか」

今度は安田の方を見る。

「そんなことはない!」安田は憮然として答えた。

「どちらも合理性にかけます。なぜなら二人とも部室で話し合う事を詳しくは知らなかったからです。ではここで皆さんにお聞きします。この中で高木さんと南原くんが部室で話し合う事を知っていた人はいらっしやいますか?」

誰も答えない。

「でしょうね。もつとも、犯人なら嘘をつくでしょうから、質問の効果はあまりありませんが。」

それでも、二人は犯人ではありません。本田君の場合、機械仕掛けしか方法はないでしょう。しかし、彼にそれを回収する素振りはありませんでした。監督の場合、鍵を持っていたというのが不自然です。遊び半分で盗ったのなら、十年も経つ前に返すか、失くしているでしょう。

では、質問を変えます。今回の事を誰かは知っていてもおかしくないと思う人はいますか?」

今度は全員が手を挙げた。

「これって……?」奈美香がつぶやいた。

「当日二人は監督に手酷く怒られていたようですから、話し合おうという流れになるのは当然です。ですから、自分は知らなくとも誰

かが知っていると買ったのでしよう。しかし、ここで日時、場所について詳しく知る事ができた人物がいます。それは結城さんです」「え!?! ちよつと待つてよ!?!」

「南原くんは携帯電話を置いていきました。その携帯電話を見れば時間も場所も簡単に分かります。メールでやり取りしていたようです。ですから、彼女には密室にする方法がありません。強いて言えば南原くんが彼女を庇って密室という不可解な状況を作ったというくらいでしょうか。ですが、どうも不自然です。」

そもそも、なぜ犯人は現場を密室にしたのでしょうか。それを考えるために少し現場の状況を整理してみましよう。部屋のすぐ外には駐車場があります。高木くんは普段は徒歩ですが、その時は車で来ていました。聞いた所では彼の車を知っている人はいないようですね。そして彼は携帯電話を車の中に置いていきました」

「あ!?!」そこまで言つて奈美香が声をあげた。

「一人、気づきました。他には?」

誰も反応しない。

「では、最後に一つ。被害者からは睡眠薬が検出されました」

「ああ、そういう事が」伊勢が納得する。「でも、なんで密室?」

「五十点。密室については分からないみたいですね。このくらいにしておきましょうか。」

では、これから事件の真相を話します。

この事件には二つの殺意と三つの計画がありました。ただし、三つ目の計画は咄嗟な思いつきで、さらには採用されたのがそれです。周りは静まり返っている。わけが分からないようである。

「二つの殺意とは高木くんのものど犯人のものです」

「高木の?」山本は驚いている。

「なぜ、高木くんは車で来たのでしょうか? それは殺した南原くんを運び出すためです。彼は部屋に二人でいたという事実をもみ消そうとしました。しかし、それは叶いません

でした。犯人に殺されてしまったからです。これが一つ目の殺意と

一つ目の計画です。

二つ目の計画はほぼ同じです。部室にいたという事実をもみ消そうとしました。しかしそれも叶いませんでした。様々なイレギュラ―な状況が起きてしまったからです。

高木くんはどこまで計画を遂行したのでしょうか。実はあと一歩のところでした。彼は南原くんを殴り倒しました。そして、運び出す前に痕跡を消そうとしました。まず、そのとき飲んでいた飲み物を冷蔵庫に戻し、紙コップを廊下のゴミ箱に捨てます。現場は部室にはなりませんし、朝になれば回収されてしまいます。

その時、彼は邪魔をされないように一度鍵を閉めました。おそらく窓から運び出そうとしたのでしよう。非常口がすぐ横にあるとは言え、廊下に出るのは危険です。ましてや、窓の外はすぐ駐車場です。こちらの方が賢明でしょう。

そして、凶器と南原くんを運び出そうとした所で、彼の計画は潰えてしまいました。彼が飲んだ飲み物には、正確には紙コップのほうだと思いますが、睡眠薬が入っていたのです。

数時間後、意識を取り戻した犯人は、眠っている高木くんを運び出そうとします。しかし、そこである事に気づきます。携帯電話がなかったのです。彼の携帯電話には履歴が残っていますから、処分しなければ大変な事になります。探そうにも犯人は彼の車を知らないし、そもそも車で来ている事、携帯電話が車の中にあつた事を知らなかったでしょう。それで、二つ目の計画も潰えます。そこでどうしたか。高木くんに殴られた事を利用して第三者に襲われた事にしようとしたのです。幸い昼に監督に怒鳴られていたので、話し合う「かも」という事を知っていた人間は多くいます。実はこの「かも」は前の二つの計画では不安要素でしたが、ここで好転します。

紙コップを処分しようとしたが、それが無い事に気がつきます。高木君が捨てた事を悟り、誰かに見られなくなかった犯人は部屋を出ることなく、鍵を確認せずにそのまま気絶したふりをします。残っていた睡眠薬を使ったかもしれません。これで密室の完成です。

もちろん犯人は……」

猪狩は指を差す。口調も元に戻す。

「南原、お前だな？」

南原は俯いている。何も言わない。

「しらばっくれてもいいけど、証拠なんていくらでも出てくる」

猪狩はそう言つと踵を返して、部屋を出て行った。

2、

「ちよつと……！」 奈美香も部屋から飛び出してきた。

「何だよ？」

「何だよって……」

「俺はお前の望んだとおり、事件についての考察を話したただけだ」

「動機は？ 聞かないの？」

「聞かない。動機がどうであれ、罪の重さに関係はないからな」

「でも……」

「それに、こつ見えて俺は情に脆いからな」

「嘘でしょ」 奈美香が即答する。

「嘘じゃない。動機なんか聞いたらあいつを許してしまいそうだ。」

それはまずい」

「ふうん……」

「……帰る」

「うん」

エピソード

「はい、これから質疑応答を始めます！」
「は？」

ここは藤井の家。一人暮らしで勝手が良いので四人の溜まり場となっている。先ほどの発言は怜奈だ。

「何で、私を混ぜてくれなかったのよお!!」

「せっかくだから私たちって言ってくれよ……」

悲しげな面持ちで言ったのは藤井。

「ごめんね、怜奈。言いだしっぺじゃなかったら私もあの場にいられたか怪しかったの」

「お前が言いだしっぺじゃなかったらあの場はなかった」

「うるさいわねえ。で、そういう事だから大目に見てよ」奈美香はウィンクしながら言った。謝罪の場面でウィンクとは何と場違いだろう。

「うう……。で、結局動機は？」怜奈が不満を募らせながらも聞いた。藤井の「俺にも謝ってくれよ」という言葉は誰一人聞かなかった。

「さあ？ 聞いてない。動機なんて聞いたって気持ちの良いものじゃないからな」

「そりゃ、そうだけど……」

「少なくとも、バッテリーの息が合わなかった、以上のものはあるだろ。そんなんで互いに殺したいほど憎んでたらこの世は終わってる。けど、あんまり想像はつかないな。想像したくないし」

「というか、いつから分かったの？」今度は奈美香が聞いてきた。「最初の時点で八割くらいかな？」

「そんなに？」

「だっておかしいだろ。密室にするくらいなら死体を運び込んだ方がいいだろ。部室で発見なんてされたら容疑者は野球部に限られる

んだし。だから、どうやったかじゃなくて、どうしてやったかを考えてた。結局、偶然だったっていう結論だったけど」

「野球部、どうなるのかな？」藤井は不安そうな顔で言った。

「元には戻らないな。でも、これ乗り越えていくんだらうな」

そう、高木はいない。

南原もいない。

それでも、誰かがその穴を埋めるだろう。

この悲しい出来事乗り越えていくのだろう。

けど、傷は残る。

乗り越える、なんて幻想かもしれない。

悲しみを心の奥にしまって見ない振りをするだけなのかもしれない。

もう戻らない。

それでも、乗り越えてほしいと願う。幻想だとしても。

現実を見つめて、目をそらさずに、何かを得てほしい。

そう願う。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0456k/>

もう戻らない

2010年10月8日13時29分発行